

# ウガノモク移植 技術試験

ハタハタ産卵漁場造成を目指して

プラザ実践チーム

日高地区水産技術普及指導所静内支所

函館水産試験場室蘭支場

静内町農林水産課

静内漁業協同組合

静内漁業協同組合東静内ハタハタ部会

## ●目的

静内漁業協同組合のハタハタ漁獲量は、平成7年以降減少傾向にある。地元では単価が高く年末の重要な収入源となることから本種を対象にした栽培事業への関心は高く、平成7年から人工孵化放流事業等を実施しているが漁獲量の増大には至っていない。

ウガノモク藻場はハタハタの産卵場として有効であるといわれているが、東静内地先では沖側にはウガノモクが生育していないことから、これを拡大することによって、ハタハタの生産増に結びつく可能性が高い。そこで、ウガノモク成体を採取し、沖に移植する技術試験に取り組み、ウガノモク藻場造成の可能性を探ることを目的とした。

## ●調査方法

- ①ウガノモク移植試験は表1に示す方法で、図1のように、石材1個に対し1～3本の割合でウガノモク244本を石材127個に固定し、東静内沖に設置した。
- ②ハタハタ産卵試験は石材に固定した27本のウガノモクを設置し、生海水が注入された12トン型円形水槽に産卵期のハタハタを収容することにより実施した。
- ③ハタハタ産卵網を、東静内漁港から東へ200m（距岸500m）の水深6m地点に設置した（写真1）。

## ●成果

- ①移植されたウガノモクにはハタハタの産卵が見られなかった。これはウガノモクの移植数及びハタハタ来遊尾数が少なかったことが要因と思われた。（写真2）。
- ②移植されたウガノモクは、11月20日から2月28日までは83%が残存していた。さらに、茎長40cm台以下のウガノモクでは90%以上の残存率であった。（図2）。
- ③陸上水槽では、産卵期のハタハタは移植したウガノモクに産卵することがわかった（写真3）。
- ④ウガノモクの移植については、大規模に行うことが必要で、それには人手及び経費が多くかかるため、事業化することは困難であると考えられた。

## ●展望と課題

- ①ウガノモクの移植は技術的には可能であるが、大規模に行わない限り効果が薄く、現実的にはこの技術は利用が難しいと思われる。
- ②今回のハタハタ産卵網には産卵が見られなかったが、今後、設置場所等の検討を含め、漁業者自らが事業を継続していく計画である。
- ③ハタハタの増殖に対しての漁業者の関心は高く、ウガノモクの移植作業には15名を越える漁業者が参加した。このように新しい増殖方法への期待度は高い。

表1 ウガノモク移植手順

項目	実施月日	内 容
付着基盤製作	10月24日 ～ 11月9日	○接着しやすくするため、石材（重量20～30kg）を水洗いし、雑物等を落とし乾燥させる。 ○古タイヤを10cm×10cmに切り出して、ゴム盤を作成する。 ○シリコンシーラントを石材のゴム盤装着部分に盛るように付け、石材1個につき2、3枚固定する。
付着補助材準備	10月24日 ～26日	○ホースを10cmに切断し、半分から下を四つ又にし、四つ又部分にビスが通りやすいよう、キリで穴をあける。 ○ビス、ワッシャーを水色に塗装する（水中での反射を防ぐため）。
ウガノモク採取	11月12日	○根を傷つけないように、潜水で採取する。 ○ウガノモクに付着している雑海藻等を取り除く。 ○ウガノモクの根の裏をコンクリートの床でこすり、岩、砂等を落とし、平らにする。 ○ウガノモクの茎長を測定する。
ウガノモクの固定	11月13日	○ホースをウガノモクの根の近くにビニールテープで止める。 ○ビニールテープの上から補強のため綿糸等で縛り固定する。 ○ウガノモクを電動ドライバーを用い、ビスで石材のゴム盤に固定する。
海中設置	11月20日	○船上よりウガノモクを固定した石材を投下し、その後潜水で手直し及び密集化を行う。

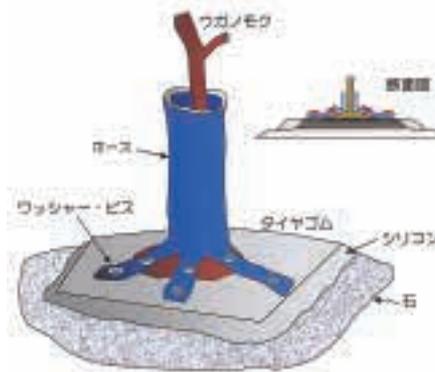


図1 ウガノモクの固定方法

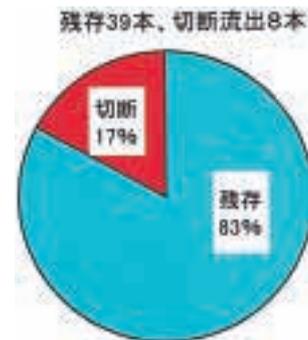


図2 ウガノモク残存率



写真1 ハタハタ産卵網の設置状況



写真2 ウガノモク移植状況



写真3 水槽で産卵されたハタハタ卵塊

【連絡先】 日高地区水産技術普及指導所静内支所  
 住所 静内町こうせい町2丁目2-10  
 電話 (01464)2-2055 FAX (01464)2-2521